vivo

水戸芸術館音楽紙［ヴィーヴォ］Vol.242

5
May 2021

Music has no borders.

特集 02

小曽根真、新譜にこめた感謝と誓い

02 小曽根真 60th BIRTHDAY SOLO「OZONE 60〜CLASSIC×JAZZ」
04 ちょっとお昼にクラシック〜砂川涼子（ソプラノ）
06 INFORMATION

水戸芸術館
ART TOWER MITO

Photo：2020年12月
当館でのレコーディング後の小曽根真さん ©noriyuki soga

特　集

小曽根真、新譜『OZONE60』にこめた感謝と誓い

小曽根真（ピアノ）インタビュー

文・聞き手：高巣真樹

©noriyukisoga

日本を代表するジャズピアニストであり、クラシックの演奏にも積極的に挑んでいる小曽根真さん。このたびピアノソロアルバムとしては13年ぶりの『OZONE 60』をリリースされました。この新譜が制作されたのは、コンサートホールATM。昨年11月末、舞台上にYAMAHAのCFXと自宅から運び込まれたスタインウェイD型が並べられ、4日間にわたる録音が行われました。「新譜誕生の地」での公演に向けて、アルバム誕生秘話や、還暦を迎えたいま、人として音楽家として大切にしていることを伺いました。

自分が行きたい場所に連れていってもらえる響き

――ホールでの録音は初めてだったそうですね。まずはこのホールの響きについてご感想をお聞かせください。

僕にとって理想なのは「一番オーガニックに、自分が行きたい場所に連れていってもらえる響きであること」です。あのとき僕は、ホールで弾いていることを忘れるくらいの感覚で弾いていました。それをあとからCDとして聴いたら、すごく幸せな音が出ていた。だから「演奏している人を幸せにしてくれる響き」と言えばいいのかな。あの4日間、ホールの響きを意識したのはヘッドフォンでプレイバックを聴くときだけ。それくらい助けていただいた。楽器も、調律も、ホールの響きも素晴らしい。ピアニストにとっては、言い訳できない状況ですけど（笑）。だから最高の響きとは「その存在を忘れてしまうほど、アーティストが自分の音楽に入っていこうとするときのお手伝いをしてくださるもの」だと思います。

Borderless ～音楽の海を自由に渡る

――今回のアルバムは、1枚目にクラシック曲と即興演奏、2枚目にジャズのオリジナル曲が収録された、集大成ともいうべき内容ですね。

クラシックの方は「CLASSICS＋IMPROMPTU」、ジャズの方は「SONGS」とタイトルをつけました。そこにある隠れたテーマは「ボーダーレス」。僕がずっとやりたいと思っていることです。例えばラヴェルの〈ピアノ協奏曲 ト長調〉の第2楽章は、アルペジオのところで初めてアドリブを入れているんですが、ジャズにしているわけではなく、ラヴェルが表現しようとしたものを僕の言葉で話しているのです。そもそも時代をさかのぼれば、クラシックのミュージシャンも即興で遊んでいましたよね。つまり「楽譜通りに弾く＝クラシック」というわけではないんです。どんな音楽も、土地ごとに異なる言語や文化から生まれてきています。ジャズは黒人のブルース。黒人の英語があり、それが音楽になったのがジャズ。日本語にも関西弁、東北弁といろいろありますよね。それがジャンルの違いみたいなものです。根本的には「音楽にボーダーはない」というのが今回のコンセプトです。

それから世の中には、ちょっとぶっきらぼうな表現をすることがジャズだと思っている人もいる。それは表現方法ですが、クラシックでも現代音楽ではそう表現する音楽もあるし、そこにはジャンルは関係ないと思います。2枚目の1曲目〈Gotta Be Happy〉から最後の〈For Someone〉まで、全然違うバリエーションがある。〈O' berek〉はほとんど楽譜に書き起こした曲で、録音に8時間くらいかかりました。いろんな曲をジャズとクラシックに分けながら、実はそこにボーダーはないことを表現したかった。

今回は2台のピアノを曲によって弾き分けたり多重録音しました。楽器も「スタインウェイはクラシックで、ヤマハはジャズ」というイメージにとらわれるのではなく、ラヴェルはヤマハで弾いたけど、本当に素晴らしい音がしていました。ヤマハの曽我紀之さんによる調律と、外山洋司さんによるスタンウェイの調律、そこに、あの両方の楽器のあのクオリティがあれば、メーカーとか関係ないのです。あとはピアニストがどう弾きたいか。そういう深い部分でとても挑戦的なアルバム作りだったと思います。

コンポーザーに会いにゆく

――クラシックの曲では、時空を越えて作曲家と対話されている印象を受けました。

まさにそれが「音楽はuniversal languageだ」と言われる一番大事な部分だと思います。音楽って、弾いている人自身が観客としても楽しんでいるような境地にいかないと、音楽という言語を使ってお客さんと会話はできない。だからそう言っていただけるのはとても嬉しいです。それをしたくて譜面通りに弾くんです。コンポーザーに会いたいから。今ラフマニノフのピアノ協奏曲第2番を練習しているのですが、この人、日本人ならきっと、浪花節が好きなんですよ。「ここにいくとみんな泣く」という人間心理をわかっている（笑）。僕もコンポーザーとして、そのボキャブラリーの多さに舌を巻いています。こんな人が百年くらい前にいたなんて、太刀打ちできないと思っちゃう。それくらい素晴らしいのです。

“For Someone”に込めた想い

僕が他にも大事にしている言葉が「共存」。夫婦で例えると、結婚すると最初はどちらかの王国に入ることが多い。そうすると絶対どちらかのストレスがたまる。理想は二つの王国が共存できること。お互いの素晴らしいところをリスペクトしあえたら素敵だと思うんです。僕は最初それができなかったので、相棒には随分苦労をかけました。今は共存を目指しているからwin-winの関係になる。自分が生きているのは相手のため。それがアルバム最後の曲〈For Someone〉につながる。僕がこれから大切にしたいテーマです。

演劇や映画から学んだ日常の大切さ

――小曽根さんは演劇や映画の音楽も手掛けていますが、普段もそうしたジャンルから影響を受けることはありますか。

それはすごく大きいです。僕は相棒の三鈴〔註：女優の神野三鈴さん〕と出会うまで、僕にとって映画は殆ど娯楽でしかありませんでした。社会的なテーマの作品とか映画や演劇にしか作れない世界観の作品を見るのって、自分の人生とも向き合うことになるので正直面倒じゃないですか。僕はもっと楽なところで生きていた。もちろんそれもひとつの生き方だし、若いうちはそれで良かったのかもしれない。でもどこかの時点から「誰かのために」ということが大切になってくる。演奏するということは、皆さんに何らかの影響を与える存在であるわけですから。

多くの人にとっての非日常って、コンサートに行ったり旅したりすることですよね。エネルギーの転換というか命の洗濯というか。でも僕ら音楽家にとっては非日常が日常。毎日が新しいことの連続。ただこういう生き方は、自分がしっかりしていないとスパイラルが浮いてしまう。三鈴は僕に「ちゃんと根っこを生やすことが大事だ」と言い続けてくれました。一方、毎日仕事して帰ってきて子どもとお風呂に入って…という日常も、実は本当にかけがえのないこと。そういう日々の営みの大切さを教えてくれたのが演劇や映画。井上ひさしさんの芝居なんかまさにそうで、台詞が素晴らしい。あんな言葉書ける人いないですよね。

ショパンとブルースの間に響きあうもの

音楽も技術に傾いてしまうと危ないんです。僕は最初、ショパンの音楽が好きではありませんでした。美しく弾かれようとするのが嫌で。でもショパンの生い立ちを知って、考えが変わりました。彼が生まれたポーランドは第一次世界大戦が終わるまで国名が地図に載っていなかったんですよね。ずっと侵略されていた歴史があるから。フランスに移り住んだショパンが、祖国を思って書き続けたのがマズルカやポロネーズだった。ちなみに僕が書いた〈O’berek〉もポーランドのダンス音楽です。そういう背景を知って初めて、「それなら僕も弾けるかも」と思えた。それでショパンのアルバムを作った。ポーランドで弾いたときは本当に怖かったけど、現地のおばちゃんたちに「あんた日本人なのに、なんでスラヴの人間の気持ちが分かるの？」と言われたのが嬉しくて。不条理な思いをしたり、明日も頑張ろうと奮い立たせるのはブルースと同じです。奴隷として連れてこられた黒人たちが怒りや悲しみ、苦しみを昇華させるために生まれた音楽。だから「ショパンはブルースと繋がる」と思いました。優れた芸術や文学は、苦しんでいたり頑張っている人たちから生まれることが多い。それなのに音楽が独り歩きして、ただ美しいものとして扱われるのは「ちょっと待って」と思っちゃう。その音楽のルーツが腑に落ちていないと僕は弾けない。そこがつながっていることが自分にとっては大事です。

――最後に、水戸芸術館のお客様へメッセージをお願いできますか。

それはね、「僕がレコーディングしたときのあの幸せな感覚を、今度は皆さんも一緒に味わってください」という一言に尽きます！

2021年3月19日（協力：ヒラサ・オフィス）

●紙面の都合上、一部割愛しております。
インタビュー全文はこちら

Anniversary Solo Album
『OZONE 60』
ユニバーサルミュージック
UCCJ-2190
CLASSICサイドと
JAZZサイドの2枚組

■公演情報
小曽根真 60th BIRTHDAY SOLO
OZONE 60
CLASSIC×JAZZ
2021.4.30(金)19:00
5.1(土)17:00 予定枚数終了
【全席指定】A¥6,000、B¥5,000、
U-25（25歳以下）¥2,000

意欲的なプログラムで堪能する、麗しの歌声
ちょっとお昼にクラシック 砂川涼子（ソプラノ）

文・聞き手：鴻巣俊博

透き通るような麗しい声と確固たるテクニックで聴衆を魅了し、日本を代表するプリマドンナの1人として輝きを放ち続けているソプラノ歌手・砂川涼子さんが「ちょっとお昼にクラシック」に登場します。昨年3月に予定されていたこの公演は新型コロナウイルス感染拡大に伴う臨時休館のためやむなく開催を見送りましたが、今年5月21日（金）、プログラムも新たに延期公演を開催することとなりました。ここでは昨年の公演に向けて行ったインタビューのコメントを交えて、砂川さんの歌との出会いや、今回のプログラムをご紹介いたします。

今回のプログラムの最初を飾る〈芭蕉布〉と〈てぃんさぐぬ花〉は、沖縄・宮古島出身の砂川さんならではの選曲。“てぃんさぐぬ花”というのは標準語で“ホウセンカ”のことで、親の教えを琉球の言葉で綴った歌です。宮古島で砂川さんはどのような少女時代を送ったのでしょうか。

「周りの子に比べれば肌の色は白い方でしたが、それでも小麦色に焼けていました。ショートカットで活発な子供でしたね。元気いっぱい駆け回っていました（笑）。小学校では、担任の先生が合唱部で歌うことを推薦してくださったことがきっかけで、小学6年生まで合唱部に所属していました。中学校に入ると、歌から離れて吹奏楽部に入部しました。身体は小さかったのにコントラバスをやっていたんですよ！ 他の女の子たちの間ではフルートやクラリネットが人気だったのですが、私は弦楽器に惹かれてコントラバスを自分から選びました。低音も素晴らしいし、他に希望者がいないのですぐに決まりましたしね（笑）。いざ弾いてみると、チューバの音が大きくて全然聞こえないんですけど、その存在感に惹かれて3年間吹奏楽コンクールにも情熱を燃やしました。高校でも吹奏楽部に入ってホルンを担当したのですが、この頃音大に進もうと思い始め、受験準備のためにホルンは1年で辞めてしまいました。今振り返ってみると、音楽漬けの宮古島の子供時代でしたね。」

宮古島で子供時代を過ごしたということが、今の歌手としての砂川さんに影響を与えたことはあるのでしょうか。

「宮古島は芸事が盛んで、三線の音や民謡を歌う声など音に囲まれて育ったということは大きかったと思います。父は音楽が好きで、エレクトーンやギターを趣味で弾いていました。でも決して音楽一家だったというわけではなくて、私が音大受験の勉強をするまで家にピアノもなかったのです。もともとは学校の先生になるために音大に入学したので、私が声楽家の道に進むと決めたとき家族は驚いていましたね。オペラは音大に入るまで観たことすらありませんでした。初めて観たのは大学内で先輩たちが出演したオペラ公演で、ドイツ人の演出家が付いて、オーケストラもいるという本格的なものでした。その時は『先輩たちの声凄いなー』とは思いましたが、まさか将来自分がオペラに出たり演技をしたりするなんてことは全く考えていませんでした。学校の先生になるために勉強していたのですが、大学4年生の時、教育実習をした時『先生って大変だなぁ…』って思ってしまったんです。毎日歌以外で大きな声を出さなくてはいけないし、テンションの持って行き方も・・・私にはちょっと無理かな、と感じて、歌の勉強を続けようと思い大学院を受験しました。このころからやっと歌の道に進もうと思い始め、いろいろなご縁に恵まれて今の私があります。」

その後、数々のコンクールで優勝、イタリアで研鑽を積みながら国内オペラの大舞台に次々に抜擢され、我が国のオペラ界になくてはならない存在へとなっていきました。「オペラ界のNHK

紅白歌合戦」と例えられることもある「NHKニューイヤーオペラコンサート」に2002年以来毎年出演しているという事実は、砂川さんの人気と実力を如実に物語っているといえるでしょう。

砂川さんの活躍の中で私が最も注目しているのは、レパートリーをデビュー当初からキープし続けているという点です。オペラ歌手はよくアスリートに例えられるように身体が楽器ですから、時間と共に声の質や音域に様々な変化が出てきます。それは必ずしも衰えということではなく、歳と共に重い声や太い声に変化し、必然的に歌う役のレパートリーが変わるということで、ごく自然なことでもあります。しかし砂川さんはデビュー当初から〈トゥーランドット〉のリューや〈カルメン〉のミカエラなど抒情的な役を今でも第一線で歌い続け、非常に高い評価を得ています。このような歌手は決して多いわけではありません。これはひとえに日々の声のケアと自分の声を知り尽くしたレパートリー選択、そして並々ならぬ鍛錬の賜物だと私は思います。そんな砂川さんは、ここ数年《トスカ》の題名役など、やや重い声が求められるドラマティックな役にも挑戦をしています。

「基本的にはレパートリーを変えているわけではなく、今まで歌ってきた役がベースにあります。その上で時々挑戦的な役に挑んでみようと思って2017年と19年にオーディションを受けて《トスカ》を歌いました。このオペラは他のドラマティックな作品よりもさらに演劇的要素が強い作品なので、“演じる”という面でとても興味のある役だったのです。声楽的には気を付けて歌わないと声を壊してしまう危険もあるのですが、それをしっかり理解してくださる演出家、指揮者、共演者の方に恵まれて無事に歌うことができました。演出家・粟国淳さんは演じることに対して高いクオリティを求め『オペラに出演するのであれば女優であれ』という考え方からとても刺激を受けましたね。不思議なことに、挑戦的な役を演じたあとにはいつもの役、ホームに戻されるという何かの力がはたらいているようで、《トスカ》の後は2回とも《カルメン》のミカエラを歌う機会をいただきました。どんどんドラマティックな役に行きっぱなしということがないので喉にも負担が少ない状態を保てています。今回最後に歌う《蝶々夫人》はまだ舞台で全曲歌ったことがありませんが、今後歌う可能性があるかな、と思っています。数年後、歌う機会をいただいた時に急に勉強を始めるのは大変なので、今から少しずつ勉強を始めています。」

今回のプログラムは今までのレパートリーに加え、これからの砂川さんの活躍を予感させる意欲的な曲も含まれています。最初にご紹介した沖縄の曲に続く日本歌曲〈霧と話した〉〈サルビア〉〈くちなし〉は三曲三様、どれも異なる性格をもつ作品です。ロッシーニが晩年に作曲した歌曲〈フィレンツェの花売り娘〉とグノーの〈宝石の歌〉は、高音で声を転がす煌びやかなコロラトゥーラのテクニックが必要とされる曲。最後は、砂川さんが新たに開拓しているレパートリーから2曲披露してくれます。團伊玖磨のオペラ《夕鶴》は、お馴染みの童話「鶴の恩返し」を元にした作品。おそらく海外で最も多く上演されている日本オペラなのではないでしょうか。今回お届けするのは鶴が人間の娘に身をやつした“つう”が歌う〈あたしの大事な与ひょう〉。自分を助けてくれた純朴な男・与ひょうが、つうが織る布を売って手にしたお金で変わっていってしまう様を嘆く歌です。続く《蝶々夫人》は前述の通りまだ舞台で全曲を歌ったことはないとのことですが、今回お届けするのは有名な〈ある晴れた日に〉ではなく、蝶々さんが歌うもう1つの聴かせどころ〈かわいい坊や〉です。これはオペラの終盤、蝶々さんが自害をする前に幼い息子に向けて歌う、母親の別れの歌。最後の2曲はどちらも高度な表現力が求められます。自身のルーツである沖縄の歌から日本歌曲、技巧的な作品からドラマティックなオペラ・アリアまで、様々な性格を持つ作品を堪能できる1時間になることでしょう。

ピアニストは、国内外の数々のオペラ公演に携わり、イタリアでも指揮者デビューを果たした仲田淳也さん。砂川さんからも信頼を得ている、歌を熟知した音楽家です。

「仲田さんは私が出演したオペラ公演の副指揮者として支えていただいたこともありますし、コンサートで何回かピアニストとして共演いただいたことがあります。アレンジもお上手で、指揮者としてご活躍もされているので、歌手の呼吸を感じてくれるとても歌いやすいピアノを弾いてくれます。イケメンですしお客様も喜ばれるのではないでしょうか(笑)」

■公演情報

ちょっとお昼にクラシック
砂川涼子（ソプラノ）
麗しの歌声

2021.5.21（金）13:30
全席指定 1,500円
（カップオン サザスペシャルブレンド 1枚付き）

●共演　仲田淳也（ピアノ）
●プログラム
普久原恒男：芭蕉布
てぃんさぐぬ花（沖縄民謡）
中田喜直：霧と話した　サルビア
髙田三郎：くちなし
ロッシーニ：フィレンツェの花売り娘
グノー：オペラ《ファウスト》より“宝石の歌”
團伊玖磨：オペラ《夕鶴》より
“あたしの大事な与ひょう”
プッチーニ：オペラ《蝶々夫人》より
“かわいい坊や”

INFORMATION

※以下は4月1日現在の情報です。公演等に関する最新情報は当館ウェブサイトにてご確認ください。

チケット・インフォメーション

《4.24（土）発売分》

■カルテット・プレミアム・シリーズ
ベルチャ弦楽四重奏団
6.19（土）16:00

■1964 音風景
7.11（日）14:00

4・5月の主な音楽イベント

コンサートホールATM

◆小曽根 真 60th Birthday Solo
OZONE 60 CLASSIC×JAZZ
4.30（金）19:00 追加公演、5.1（土）17:00 予定枚数終了
A席¥6,000/B席¥5,000/U-25（25歳以下）¥2,000

◆NHK水戸児童合唱団 第6回定期演奏会
5.5（水・祝）14:00
一般¥1,000/大学生以下¥500

◆ちょっとお昼にクラシック 砂川涼子（ソプラノ）
5.21（金）13:30
¥1,500（カップオン サザスペシャルブレンド1枚付）

エントランスホール

◆パイプオルガン プロムナード・コンサート（要事前予約）
□4.18（日）13:00〜13:45 都築由理江、古賀智子（ヴァイオリン）
□4.25（日）12:00〜12:45 山田由希子、太田 剣（サクソフォン）
□5.16（日）12:00〜12:30/14:00〜14:30 栗山美緒

演劇・美術のイチオシ企画！

ACM劇場

◆ゆうくんとマットさんの
「おじいちゃんはロボットはかせ」
出演：ゆうくんとマットさん（小林祐介・大内真智）、堀口理恵、木村隆之、植田そうへい、菊地侑紀、篠原 立
5.1（土）14:00、5.2（日）〜5（水）各日11:00
料金［全席自由］おとな¥2,300/
こども（3歳〜小学生）¥1,000

現代美術ギャラリー

◆3.11とアーティスト：10年目の想像
2.20（土）〜5.9（日）
［休館日］月曜日※ただし5.3（月・祝）は開館
［開場時間］10:00〜18:00※入場は17:30まで
［入場料］一般¥900/団体（20名以上）¥700
※高校生以下・70歳以上、障害者手帳をお持ちの方と付添いの方1 名は無料

加茂昂（福島県双葉郡浪江町北井出付近にたたずむ）2019　撮影：加藤健

「茨城の演奏家による演奏会企画」2020年度募集の見送りについて

新型コロナウイルスの感染拡大防止のために、当館でも多くの公演が中止、延期となっています。「茨城の演奏家による演奏会企画」についても、2019年度から2021年度企画までの多くの公演が1年以上の延期を余儀なくされております。その関係で2022年度は、2021年度実施予定事業を開催する見込みとなっており、つきましては、2022年度の本企画の新規募集は見送らせていただくこととなりました。何卒、ご了承賜りますようお願い申し上げます。

2021年度「市民のためのオルガン講座」受講生募集！

講師は、オルガニストとして各地で活躍中の室住素子さん。一人一人のレベルや個性に合わせて行われる丁寧なレッスンが人気です。

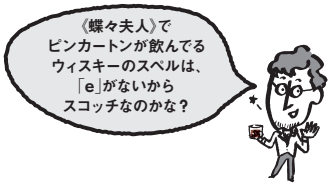
★コースと定員：実技レッスン初級・4名、中級・若干名、一回体験・12組
★レッスン：2021年9月〜2022年3月にかけての計12回
★実技レッスン発表会：2022年3/20（日）13:00〜
【受付期間】2021年4/1（木）〜5/9（日）18:00必着
※スケジュールや応募方法の詳細は、当館ウェブサイトをご覧ください。

水戸室内管弦楽団 新譜リリース！

小澤征爾館長と水戸室内管弦楽団が、ピアニストの児玉桃さんと2006年に共演した際の録音が、ECMから3月12日に発売されました。水戸室内管の瑞々しい演奏、そして透き通ったピアノの響きが鮮やかな印象を残す待望の一枚です。

■『細川俊夫：月夜の蓮 ―モーツァルトへのオマージュ―、モーツァルト：ピアノ協奏曲 第23番』
品番：UCCE-2094　SHM-CD　価格：3,080円（税込）

2021年4月6日発行（第242号）
編集：水戸芸術館音楽部門 ｜ 中村晃、関根哲也、高巣真樹、篠田大基、鴻巣俊博、石井亮子、高木春佳
発行：（公財）水戸市芸術振興財団　〒310-0063 茨城県水戸市五軒町1-6-8　Tel.029-227-8118（音楽部門）
Tel.029-231-8000（チケット予約センター 9:30〜18:00・月曜休館）　https://www.arttowermito.or.jp/
デザイン：K5 ART DESIGN OFFICE.　印刷製本：山三印刷株式会社



■編集後記

鈴鹿の1コーナーへの飛び込みを見て以来お気に入りのドライバーだったセバスチャン・ベッテルが今季移籍する。そんなF1ネタを共にしてきた（り）さんも水戸を去る。寂しい春ですが、いつか現場で！長い間お疲れ様でした。（て）

かけがえのない、およそ10年間でした。貴重な経験を沢山させていただきました。…死にそうなくらい緊張したこともあったけれど。この欄に収まりきらない感謝の気持ちを込めて。皆さま、本当にありがとうございました。（り）

最近、韓国ドラマや映画を観ながら韓国語をなんとなく勉強しているのですが、同じセリフでもその物語によって翻訳が違うということを発見してしまい、翻訳家の仕事は奥深いな、と一人で感動しています…（春）

水戸芸術館で働き始めた4年前の春、職場の右も左も分からない私にいろいろ教えてくださったのが（り）さんでした。日々の事務仕事から超一流演奏家の譜めくりまで完璧にこなす（り）さんは尊敬の的でした。益々のご活躍を！（鴻）

今回の表紙は、録音を終えたばかりの小曽根真さんのショットです。撮影されたのは、なんと調律師の曽我紀之さん。二刀流に脱帽です！「最高のアルバムにしたい」というアーティストと録音チームの真剣かつ熱い雰囲気が伝わってきます。（樹）

東日本大震災から10年。光陰矢の如し。（り）さんも私も、2011年に水戸芸術館に入ったのでした。10年間の沢山の公演。その舞台裏にあったもっと沢山の仕事。本当に沢山お世話になりました。ありがとうございました！（篠）

10年間苦楽を共にしてきた（り）さんが、活躍の場を新天地に移される。偉大な先達が水戸芸術館に注いできた想いや願いを、（り）さんも受け継ぎ、これからは水戸を超えて発信してくれることだろう。「想念」は時間も場所も超えて繋がっていく。（中）